

## シャルル＝フランソワ・ドービニー展

損保ジャパン日本興和美術館（西新宿） 2019.04.20～06.30

「シャルル＝フランソワ・ドービニー」（1817～1878）は、フランスのバルビゾン派～印象派への架け橋となった風景画家で、多くの地を旅行して戸外で観察した作品を数多く制作している。本展は、画伯の初期～晩年の絵画・版画「約60点」と周辺の画家「コロー」



「クールベ」「ドーミエ」らの作品「約20点」で構成される国内で開催される本邦初の本格的な展覧会としての開催である。尚、「バルビゾン派」という名前は、パリに近いフォンテーヌブローの森の中にある“小さな村”に由来するものである。

《オワーズ河畔》 1865年頃 油彩/板

画伯は、巨匠「コロー」から大きな影響を受け、彼と共に「ボタン（小舟の意味）と名付けた専用小舟「アトリエ号」を入手し、川に浮かべて水面から岸辺の景色を描くために、オワーズ川やセーヌ川へ出かけて頻りに制作旅行を行った。その結果、“水面に反射する光の明るさとニュアンスの河川を主題とした風景画の分野で、静かで湿り気を帯びた空の広がり、淀んだ水辺の景観を描いた作品を残して、戸外風景の新しい側面を切り開いた”とされている。

「バルビゾン派」の画家たちは、“どうすれば自然を自分が理想とする純粋な姿で表現できるか”を一生かけて追及しており、水辺の光を大胆に表現した作品は「印象派の源流」であるとされている。作品の特徴は、刻々と変化する大河、池、川などの水辺の情景を主題として、淀んだ水の静かな詩情を素早いタッチで見事に描くことで、これらの作風は印象派の画家たちの指針となって、その後「モネ」や「ゴッホ」などの画家たちに多大の影響を与えた“水の画家”として知られている。



《ポルトジョアのセーヌ川》



《ブドウの収穫》 2作品共 1863年頃